

平成三年四月再版

小 祈 禱 書

日本ハリストス正教會

凡^{およ}そ祈^{きた}禱^{たう}の時^{とき}に求^{もと}むる所^{ところ}は、之^{これ}を得^えん
こ信^{しん}ぜよ、然^{しか}らば爾^{なんぢ}等^らに成^ならん。

マルコ福音書第十一章二十四節

爾^{なんぢ}等^ら若^もし我^{われ}に居^おり、我^わが言^{ことば}爾^{なんぢ}等^らに居^おら
ば、凡^{およ}そ望^{のぞ}む所^{ところ}を求^{もと}めよ、然^{しか}らば爾^{なんぢ}等^らに
成^ならん。

イオアン福音書第十五章七節

朝あさの祈こ禱う文ぶん

覺さめ興おき諸しよ業げふに先さきちて見みざる所ところなき神かみの前まへに己おのれ
を思おもひ敬つしみて立たち己おのれに十じふ字じ架かを畫くわして誦しやうすべし

父ちちと子こと聖せい神しんの名なに依よる。「アミン」。

之これを傾しぼらくして爾なんぢが感かん覺かくの鎮しづまり爾なんぢが思おもひの地ち上じやうを離はな
るるを俟まちち然しかる後のち心こころを用もちゐて徐しづかに左さの祈こ禱うを
誦しよすべし

税ぜい吏りの祈こ禱う文ぶん

神かみよ、我われ罪ざい人にんを憐あはれみ給たまへ。

朝の祈禱文

税吏の祈禱

司祭あらば誦して曰く

我等の神は崇讃らる、今も何時も世世に。「アミン」。

司祭なければ左の如し

主イイススハリストス神の子よ、爾が至淨の母よ、

諸聖人この祈禱に因て、我等を憐み給へ。「アミン」。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

天の王慰る者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満た

ざる所なき者よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜ふ主

よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔く
せよ。至善者よ、我等の靈を救ひ給へ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐
めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。
「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。
主宰よ、我等の愆を赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病

を癒し給へ。悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

「アミン」。

天に在す我等の父よ願は爾の名は聖とせられ。爾の國は來り爾の旨は天に行はるるが如く、地にも行はれん。我が日用の糧を今日我等に與へ給へ。我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し

給へ。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ。蓋國と權能と光榮は爾に世世に歸す。「アミン」。

聖三者讃詞

至善者よ、我等寤興きて爾に伏拜す全能者よ、天使の歌を以て爾に呼ぶ聖、聖、聖なる哉神よ、生神女に因りて我等を憐み給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す。

主よ、爾は我を覺して榻より起せり我が智慧と心

こを照し我が口を開き爾聖三者を讃め歌はせ給へ。
聖、聖、聖なる哉神よ、生神女に因りて我等を憐み給へ。

今も何時も世に。「アミン」。

審判者俄かに來らば、人人の行は顯はれん、故に我等夜半に畏れて呼ぶ、聖、聖、聖なる哉神よ、生神女に因りて我等を憐み給へ。

主憐めよ。十二次

祝しゆく

文ぶん

聖せい三さん者しやよ、我われ寤まひ興おきて爾なんぢに感かん謝しやす。蓋けだし爾なんぢの大おほいなる仁じん
慈じと寛くわん忍にんに依より我われ愠おこたりて罪つみある者ものを怒いからず、並ならび
に我われを我われが惡あくと共ともに亡ほろぼさず、乃すなはち常つねの仁じん愛あいを顯あらはし、
我わが無む心しんに寢いぬるを興おこして、朝あさの祈き禱たうを奉たてまつり、爾なんぢの
權けん能のうを讚さん榮えいせしめ給たまへばなり。今いまも我わが靈たましひの目めを
照てらし、我わが口くちを開ひらきて、爾なんぢの言ことばを習ならひ、爾なんぢの誠いましめを悟さとり、
爾なんぢの旨むねを行おこなひ、中ちゆう心しんに承うけ認さめて、爾なんぢを歌うたひ、爾なんぢ父ちちと

子こと聖神せいしんの至聖しせいなる名なを讃揚さんやうせしめ給たまへ。今いまも何時いつも世世よよに。「アミン」。

來きたれ、我等われらの王神わうかみに叩拜こうはいせん。

來きたれ、ハリストス我等われらの王神わうかみに叩拜こうはい俯伏ふくせん。

來きたれ、ハリストス我等われらの王神わうかみの前に叩拜こうはい俯伏ふくせ

ん。

第五十聖詠

神かみよ、爾なんぢの大おほいなる憐あはれみに因よりて我われを憐あはれみ、爾なんぢが惠めぐみの多おほ

きに因りて、我の不法を抹し給へ。屢我を我が不法
より洗ひ、我を我が罪より清め給へ。蓋我は我が不
法を知る。我の罪は常に我が前に在り。我は爾獨爾
に罪を犯し、惡を爾の目の前に行へり。爾は爾の審
斷に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に
於て妊まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾
は心に眞實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我
に顯せり。「イソプ」を以て我に沃げ、然せば我潔

くならん我を滌へ然せば我雪より白くならん我
に喜と樂とを聞かせ給へ然せば爾に折られし骨
は悦ばん爾の顔を我が罪より避け我が盡くの不
法を抹し給へ神よ潔き心を我に造れ正しき靈を
我の衷に改め給へ我を爾の顔より逐ふこと勿れ
爾の聖神を我より取上ぐること勿れ爾が救の喜
を我に還せ主宰たる神を以て我を固め給へ我不
法の者に爾の道を教へん不虔の者は爾に歸らん

こす。神よ、我が救の神よ、我を血より救ひ給へ。然せば我が舌は爾の義を讃揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讃美を揚げん。蓋爾は祭を欲せず、欲せば我之を献らん。爾は燔祭を喜ばず、神に喜ばるる祭は痛悔の靈なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給はず。主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給へ。其時に爾義の祭、献物と燔祭とを喜び饗けん、其時

に人人爾の祭壇に懺を奠へんこそす。

第一祝文 聖大マカリイの原文

神よ、我罪人を淨め給へ。我未だ善を爾の前に爲さざればなり。猶我を凶惡より救ひ給へ。願くは爾の旨は我の中に在り、我罪を獲ずして我が當らざる口を開き、爾父と子と聖神の聖なる名を讃揚せん、今も何時も世世に、「アミン」。

第二祝文 上に同じ

救世主よ、我寤め興きて夜半の歌を爾に奉り、伏し
拜みて爾に籲ぶ。甘んじて釘うたれし者よ、罪の死
に寝ぬるを我に許す勿れ。猶我を恵みて我情に偃
す者を速に起し、爾の前に立ちて祈禱する際に扶
けよ。ハリストス神よ、夜の眠の後に、罪なき日を我
に照して我を救ひ給へ。

第三祝文 上に同じ

人を愛する主宰よ、我覺め起きて爾に趨り附き爾

の仁慈に因て、今爾が命ぜしこを行はん。す。爾に祈る、何れの時、何れの事にも我を扶けよ。我を凡そ斯の世の惡事と惡魔の謀より脱し、我を救ひて、爾が永遠の國に入れ給へ。蓋爾は我を造り、我に萬善を備へ與ふる主にして、我が賴は盡く、爾に在ればなり。我光榮を爾に歸す、今も何時も世世に。一アメン。

第四祝文 上に同じ

主よ、爾は多くの慈と廣き恵を以て、我爾の僕(婢)に、過ぎ去りし夜の時を惡敵に惱まされずして度らせ給へり。主宰、萬物の造者よ、爾自ら我に眞の光に照されたる心にて、爾の旨を行はしめ給へ。今も何時も世世に。「アミン」。

第五祝文

主全能者、天軍と諸の肉身との神よ、高に居り、卑に臨み、心腹を悟り、人の密事を預め知り、始なくして

常に存する光、變なく影の移もなき者よ、死せざる王よ、我等が今爾が恵の廣きを恃み、我が汚れたる口を以て爾に献る祈禱を受け、我等が行と言ご思にて知るご知らずして犯しし諸の罪を赦し我等を肉身ご靈魂ごの諸の汚より淨め、我等に醒めたる心ご愼みの思ごを以て、此の生命の夜を度り、爾が獨生の子、我が主、神、救者、イエス、ハリストスの光り輝く日、乃ち萬有の審判者が各人の行に應じ

て報ゆるが爲光榮を顯して來らん日の臨むを俟
ち我等が偃し情らず乃ち寤め興きて務に備ふる
を認められ喜こ彼が光榮の妙なる宮ご彼の祝ふ
者の斷えざる聲及び爾が顔の言ひ盡されぬ美善
を見る者の言ひ盡されぬ慰の處に共に入らしめ給
へ。蓋爾は萬有を照し且聖にする眞の光なり。總て
の造物は爾を世世に讃め歌ふ。「アミン」。

第六祝文

至上しじやうの神かみ、慈憐じれんの主しゆよ、我等われら爾なんぢを讃揚さんやうす、爾なんぢは常つねに我われ等らに廣大かうだいにして測り難く、光榮くわうえいにして驚くべき數等ちうたうに廣大かうだいにして測り難く、光榮くわうえいにして驚くべき數へ盡くされぬ事を行ひ、更に我等われらに眠を賜ひて、我が弱きを息ましめ、我が疲れ易き身體の苦勞を弛べ給ひしによる。我等われら爾なんぢに感謝す、蓋我等われらを我が惡と與に亡さず。乃ち常の仁愛を顯し、我が無心に寢ぬるを興して、爾の權能を讃榮せしめ給へばなり。今猶爾の測り難き仁慈に祈る、我が心と目とを照

し、我が智慧ちゑを情おこたりの眠ねむりより起おこし、我が口くちを開ひらきて、爾なんぢの讚美さんびを満みたし、我等われちに絶たえず、爾なんぢを歌うたひ、爾事なんぢごと毎ごとに萬有ばんいうより讚榮さんえいせらるる神かみ、無限むげんの父ちち、爾なんぢの獨生さくせいの子こ、及び至聖しせい至仁しじん生命いのちを施ほどこす、爾なんぢの神しんを讚揚さんやうせしめ給たまへ。今いまも何時いつも世世よよに。「アミン」。

第七祝文しちゆくぶん

至聖しせい生神しょうしん女ぢよに奉たてまつる夜半やはんの歌うた

女宰ぢよさいよ、我爾われなんぢの恩寵おんちようを讚ほめ歌うたひて、爾なんぢに祈いのる。此この恩寵おんちようを我われが智識ちしきに垂たれ給たまへ。我われを導みちびきて正ただしくハ

リストスの誠の道を履ましめ給へ。我が悶の眠を
覺して讚歌を奉らしめ給へ。神の嫁よ、爾の祈禱を
以て罪惡の縲に縛らるる者を釋き給へ。晝夜我
を守りて、我を攻むる敵より救ひ給へ。生命を賜ふ
神を生し者よ、我慾に殺されたる者を活し給へ。暮
れざる光を生みし者よ、我が瞽となりし靈を明し
給へ。嗚呼妙なる主宰の宮よ、我を聖神の家となし
給へ。醫師を生みし者よ、我が靈の多年の疾を愈し給

へ。世の風濤に漾はさるる我を痛悔の路に向はせ
給へ。我を永遠の火、毒蟲、地獄より救ひ、多くの
罪を犯しし我を惡魔の喜とならしむる勿れ至り
て玷なき者よ、重る罪に古びし我を、新なる者とな
し給へ。我を諸の苦の外に脱し、萬有の主宰に憐
を垂れしめて、我に諸聖人と共に天の樂を得し
め給へ。至聖なる童貞女よ、爾が當らざる僕(婢)の聲
を聞き給へ。至淨の者よ、我に涙の流を賜ひて、我が

靈たましひの穢けがれを清きよめ給たまへ。我われ常つねに中心ちゆうしんより歎たん息そくを爾なんぢに奉たてまつる。女ぢよ宰さいよ、思おもひを垂たれ給たまへ。我わが禱いのりの務つとめを受うけて、之これを仁じん慈じなる神かみに捧ささげ給たまへ。神かみの使つかひに勝まされる者ものよ、我われを斯この世よの亂みだれに勝かつ者ものとなし給たまへ。光ひかりを放はなてる天てんの幕まくよ、我わが衷うちに聖せい神しんの恩おん寵ちやうを照てらし給たまへ。全まづく玷きづなき者ものよ、我われ汚けがれ穢けがれし手てを揚あげ、口くちを開ひらきて爾なんぢを崇あがめ讃ほむ。務つとめてハリストスに祈いのり、靈たましひを壊やぶる誘いざなひより我われを救すくひ給たまへ。蓋けだし尊たん敬けい叩こう拜はいはハリストスに歸きす今いまも

何時いつも世世よよに。「アミン」。

第八祝文 しやくぶん 我主わがしゆイエススハリストスに捧ささぐ

至し慈じ至し仁じんなる我わが神かみ、主しゆイエススハリストスよ、爾なんぢは多おほくの愛あいを以もつて、萬民ばんみんを救すくふが爲ために降くだりて人じん體たいをとり給たまへり。救世主きうせいしゆよ、我われ猶なほ祈いのる、恩寵おんちように依よりて我われを救すくひ給たまへ。蓋行けだしおこなひに依よりて我われを救すくはば、恩寵おんちようと錫たまものとに非あらず、當然たうぜんの事ことなるのみ。嗚呼ああ慈いつくしの深ふかく、憐あはれみの言いひ盡つくされぬ我わがハリストスよ、爾言なんぢいへり、我われを信しんず

る者は、生きて永く死を見ざらん。若し爾に於ける
信は能く望を失ふ者を救はば、視よ、我は信ず、我を
救ひ給へ。爾は我の神と造者なればなり。願くは我
が信を以て行に代へん。我が神よ、敢て我を義とす
る行を求る勿れ。願くは彼の信は萬事の缺くるを
補はん。彼は對へ、彼は我を義とし、彼は我を爾が永
遠の光榮に與る者となさん。神の言よ、願くは一サ
タナ―に我を虜にし、我を爾の手、爾の牢より奪ひ

て誇^{ほこ}るを得^えざらしめよ、乃^{すなは}ち我^わが欲^{ほつ}するも我^{われ}を救^{すく}
ひ給^{たま}へ欲^{ほつ}せざるもハリストス我^わが救^{きう}主^{しゆ}よ、急^{いそ}ぎ急^{いそ}
げよ、我^{われ}殆^{ほと}んど亡^{ほろ}びんごす、我^{われ}母^{はは}の胎^{たい}内^{ない}に居^おる時^{とき}よ
り、爾^{なんぢ}は我^{われ}の神^{かみ}なればなり。主^{しゆ}よ、今^{いま}我^{われ}に爾^{なんぢ}を愛^{あい}する
こと我^わが前^{まき}に罪^{つみ}を愛^{あい}せしが如^{ごと}く、又^{また}情^{おこたり}無^なくして慇^{ねんごろ}
に爾^{なんぢ}に事^{つか}ふること、前^{まき}に譌^{いつはり}ある「サタナ」に事^{つか}へ
しが如^{ごと}くならしめ給^{たま}へ。願^{ねがは}くは我^{われ}存^{ぞん}命^{めい}の日^ひ、恒^{つね}に爾^{なんぢ}
主^{しゆ}吾^わが神^{かみ}イイススハリストスに勤^{つと}めん、今^{いま}も何^い時^つ

も世世に。「アミン」。

第九祝文

人の生命を守護する天使に捧ぐ

聖天使、我が廢てられし靈、我が慾に染みし生命
に附き添ふ者よ、我罪人を棄つる勿れ、我が愼な
きを以て我に離るる勿れ。狡猾の惡魔に、此の死す
べき體の慾に乗じて我を制する隙を與ふる勿れ。
我が便なくして弱りたる手を堅固にし、我を救ひ
の途に導き給へ。嗚呼、聖なる神の使、我が廢てられ

し^{たましひ}靈^{たましひ}と體^{からだ}とを護^{まも}り覆^{おほ}ふ者^{もの}よ、凡^{およ}そ我^わが存^{ぞん}命^{めい}の日^ひに
於^{おい}て爾^{なんぢ}に犯^{おか}しし所^{ところ}を盡^{ことごと}く赦^{ゆる}し給^{たま}へ。若^もし今^{いま}過^すぎ去^さ
りし夜^よに於^{おい}て罪^{つみ}に陷^{おちい}りしこそあらば、此^{この}日^ひに於^{おい}て、
我^{われ}を覆^{おほ}ひ給^{たま}へ。我^{われ}を仇^{あだ}の諸^{もろもろ}の誘^{いざなひ}より守^{まも}り、我^{われ}に罪^{つみ}を
以^{もつ}て神^{かみ}の怒^{いかり}を招^{まね}くこそなからしめ給^{たま}へ。我^わが爲^{ため}に
主^{しゅ}に禱^{いの}りて、我^わが彼^{かれ}を畏^{おそ}るる心^{こころ}を固^{かた}め、我^わが其^その仁^{じん}
慈^じを受^うくるに勝^たふる僕^{ぼく}婢^ひたるを顯^{あらは}さしめ給^{たま}へ。
「アミン」。

第十祝文

至聖生神女に捧ぐ

至聖なる吾が女宰生神女よ、爾の聖にして全き力
ある祈禱を以て、我爾の賤しき當らざる僕(婢)より
倦、忘、無智、惰を遠け及び我が廢てられし心ご、我
が昏されし智識より、都ての汚ご詐ご誹ごの念を
遠ざけ給へ。並に我が慾の焰を滅し給へ。我貧く
して廢てられたる者なればなり。我を多くの邪な
る記念ご志より離し、凡ての惡事より我を救ひ給

へ蓋爾けだしなんぢは萬世ばんせいに尊たうさまれ、爾なんぢの至尊しそんなる名なは世世よよに

崇讚あがめほめらる。「アミン」。

若もし忙いそがくして早はやく爾なんぢの業げうに就つかざるを得えざれば
定さだめたる悉ことごとくの祝文しゆくぶんを急いそぎ乍ながら心こころを專もつぱらにせずし
て讀よまんより寧むしろ數端すたんに氣きを附つけ心こころを用もちゐて讀よ
む可べし

我わが名なの依よる所ところの聖人せいじんを呼よびて祈いのる文ぶん

聖せいにして神かみに喜よろこばるる(某)よ、我わが爲ために神かみに祈いのり給たま
へ、我われ熱心ねつしんにして爾速なんぢすみやかに助たすくる者もの、我わが靈たましひの爲ために禱いの

る者に趨り附けはなり。

至聖生神女讃歌

生神童貞女よ、慶べ、恩寵に満たさるるマリヤよ、主
は爾と偕にす、爾は女の中にて讃美たり、爾の胎の
果も讃美たり、爾は我等の靈を救ふ主を生みたれ
ばなり。

十字架讃詞

主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ。我皇帝に敵

に勝^かたしめ、爾^{なんぢ}の十字^{じふ}架^かにて爾^{なんぢ}の住所^{すまひ}を護^{まも}り給^{たま}へ。

記^き憶^{おく}文^{ぶん}

主^{しゆ}よ、我^わが今^{こん}上^{じやう}皇^{くわう}帝^{てい}、皇^{こう}后^{くわう}、皇^{たい}太^{とう}后^{くわう}、皇^{たい}太^{たい}子^し、皇^{くわう}族^{ぞく}、及^{およ}び百^{ひやく}官^{くわん}有^{いう}司^しを憐^{あは}みて救^{すく}ひ給^{たま}へ。

主^{しゆ}よ、教^{けう}會^{くわい}を司^{つかさど}る我^{われ}等^らの大^{だい}主^{しゆ}教^{けう}(某^な)、主^{しゆ}教^{けう}(某^な)、神^{しん}父^ふ(某^な)、及^{およ}び總^{すべ}の教^{けう}役^{えき}者^{しや}を憐^{あは}みて救^{すく}ひ、彼^{かれ}等^らの祈^き禱^{たう}に因^よりて、我^{われ}罪^{ざい}人^{にん}をも憐^{あは}みて救^{すく}ひ給^{たま}へ。

主^{しゆ}よ、我^わが父^ふ母^ぼ(某^な)、代^{だい}父^ふ母^ぼ(某^な)、及^{およ}び兄^{けい}弟^{てい}姉^{まい}妹^{まい}、我^わが肉^{にく}身^{しん}

の親類、我が族の諸の縁者親友を憐みて救ひ、彼等に爾の今世來世の福を與へ給へ。

死者の記憶文

依時課程平日夜半課二六頁

主よ、復活と永生との望を懷きて眠りし我等の諸父兄弟及び都の敬虔と信仰とを以て世を終りし者を記憶し、彼等に凡そ自由と自由ならずして、或は言、或は行、或は思にて犯しし罪を赦し、彼等を明るき處涼しき處安樂の處、諸の疾と悲と嘆との遠

ざかりし處、爾が顔の光の輝きて、世世より爾の悉くの聖者を樂しましむる處に住はせ、彼等と我等とに、爾の國と、爾の言ひ難き永遠の福樂に與るここと、爾の限なき福なる生命の喜とを與へ給へ。蓋ハリストス我等の神よ、爾は眠りし爾の僕婢の生命と復活と安樂なり、我等爾と、爾の無原の父と、至聖至仁生命を施す爾の神とに光榮を歸す。今も何時も世世に。「アミン」。

祈禱の收結

常に福にして全く玷なき生神女我が神の母なる
爾を讚美するは眞に當れり。ヘルウムより尊く、セ
ラフムに並なく榮え貞操を壞らずして神言を生
みし、實の生神女たる爾を崇め讚む。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

「アミン」。

主イエスハリストス神の子よ、爾が至淨の母と、

我が克肖捧神なる神父と諸聖人との祈禱に因りて、我罪人を救ひ給へ。「アミン」。

朝の祈禱文 終

業を始むる前の祈禱

業を終る後の祈禱

三六

業を始むる前の祈禱

主しゆ イイススハリストなんぢ 爾なんぢ が無原むげん の父ちち の獨生どくせい の子こ
よ、爾なんぢ は至淨じじやう の口くち にて曰い へり、我われ なくんば能よ く爲な す
なしこ。主しゆ よ、我わ が主しゆ よ、我われ は信しん を以もつ て爾なんぢ の言ことば を心こころ に
懷いだ き、爾なんぢ の仁慈じんじ を拜をが みて禱いの ち、我われ 罪人ざいじん が始はじ むる所ところ の
業げう を佑たす けて、之これ を遂さ げさせ給たま へ。父ちち 子こ 聖神せいしん の名な
に依よ りてなり。「アミン」。

業を終る後の祈禱

萬福を賜ふ我がハリストスよ、爾に感謝す願くは
恒に我が靈に喜ぶ樂を満てて我を救ひ給へ爾
は獨大仁慈の主なればなり。

受業前の祝文

智慧を賜ふ教師、明悟を與ふる主宰、智識の開けざる
者の教導者、能力の乏しき者の守護者よ、我が心を
誨へて之を固め給へ。父の言よ、我に言を與へ給へ。
蓋我口を閉ぢずして爾に呼ぶ仁慈なる者よ、我罪

人^{にん}を憐^{あはれ}み給^{たま}へ。

或^{あるひ}は

至^し善^{ぜん}の主^{しゅ}よ、爾^{なんぢ}が聖^{せい}神^{しん}の恩^{おん}寵^{ちよう}を遣^{つかは}し、我^{われ}等^ちに靈^{たましひ}の力^{ちから}を賜^{たま}ひて之^{これ}を固^{かた}め給^{たま}へ。我^{われ}等^ちが授^{さづ}けらるる教^{おしへ}に心^{こころ}を用^{もち}ひ、益^{ます}生^{はす}長^{せい}して、爾^{なんぢ}我^{われ}が造^{さう}物^{ぶつ}主^{しゅ}の光^{くわう}榮^{えい}、吾^わが親^{おや}の慰^{なぐさめ}、教^{きやう}會^{くわい}と生^{しやう}國^{こく}の利^り益^{えき}となるを得^えしめ給^{たま}へ。

受^{じゆ}業^{げつ}後^ごの祝^{しゆく}文^{ぶん}

造^{さう}物^{ぶつ}主^{しゅ}よ、爾^{なんぢ}の恩^{おん}寵^{ちよう}を我^{われ}等^ちに賜^{たま}ひて學^{がく}業^{げふ}に心^{こころ}を用^{もち}

ゐさせ給ひしを爾に感謝す我等の首長、父母、教師
等、我等を導きて善を知らしむる者に福を降し、及
び我等に此の學業を繼ぐが爲に能力を與へ給へ。

食前の祝文

天に在す我等の父よ…（主禱）

或は

主よ、衆人の目は爾を望む。爾は時に隨ひて彼等に
糧を賜ふ。爾の豊かなる手を開きて、諸の生ける者を

爾なんぢの惠めぐみに飽あかしむ。

食後しょくごの祝文しゆくばん

ハリストス我われが神かみよ、爾なんぢが地上ちじやうの福ふくを我等われらに飽あかしめ給たまひしを爾なんぢに感謝かんしゃす。求もとむ、爾なんぢの天國てんこくをも我等われらに得えしめ給たまへ。

或あるひは

讚揚さんやうせらるる神かみ、我等われらを幼おきなより憐あはれみ養やしなひ、凡およそ生いける者ものに糧かてを賜たまふ者ものよ、我等われらの心こころを喜よろこび樂たのしみに満み

て、我等が恒に諸の事に乏しからずして、我が主イエスハリストスに因り、諸の善事を行ふに足るものごならしめ給へ。蓋光榮、權柄、尊敬は、爾と爾の獨一子と聖神とに世世に歸す。「アミン」。

或は

主よ、爾を讃揚す。聖なる者よ、爾を讃揚す。王よ、爾を讃揚す。我等に樂みて食するを賜へばなり。求む、聖神を我等に満て、爾が各人の行に應じて報ゆる時、

我^{われ}等^らを爾^{なんぢ}の前^{まへ}に喜^{よろこ}ばれ、耻^{はぢ}を受^うけざる者^{もの}と顯^{あらは}し給^{また}へ。

暮くれの祈き禱たう文ぶん

司祭しさいあらば誦しやうして曰いはく

我等われちの神かみは崇あがめ讃ほめらる、今いまも何時いづつも世よ世よに。「アミン」。

司祭しさいなければ左さの如ごとし

主しゆイイススハリストス神かみの子こよ、爾なんぢが至し淨じやうの母ははよ、

諸聖人しよせいじんこの祈禱きたうに因よて、我等われちを憐あはれみ給たまへ。「アミン」。

我等われちの神かみよ、光榮くわうえいは爾なんぢに歸きす、光榮くわうえいは爾なんぢに歸きす。

天^{てん}の王^{わう}慰^{なぐさむ}る者^{もの}よ、眞^{しん}實^{じつ}の神^{しん}、在^あらざる所^{ところ}なき者^{もの}、満^みた
 ざる所^{ところ}なき者^{もの}よ、萬^{ばん}善^{ぜん}の寶^{ほう}藏^{ざう}なる者^{もの}、生^{せい}命^{めい}を賜^{たま}ふ主^{しゅ}
 よ、來^{きた}りて我^{われ}等^らの中^{うち}に居^をり、我^{われ}等^らを諸^{もろもろ}の穢^{けがれ}より潔^{いさぎよ}く
 せよ。至^し善^{ぜん}者^{しゃ}よ、我^{われ}等^らの靈^{たましひ}を救^{すく}ひ給^{たま}へ。

聖^{せい}なる神^{かみ}、聖^{せい}なる勇^{いう}毅^き、聖^{せい}なる常^{じょう}生^{せい}の者^{もの}よ、我^{われ}等^らを憐^{あはれ}
 めよ。三次

光^{くわう}榮^{えい}は父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に歸^きす、今^{いま}も何^い時^つも世^よ世^よに。
 「ア、ミ、ン」。

至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。
主宰よ、我等の愆を赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病
を癒し給へ。悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

「アミン」。

天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾
の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く、地にも

行はれん。我が日用の糧を今日我等に與へ給へ。我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ。

蓋國ご權能ご光榮は爾に世世に歸す。「アミン」

讃詞

主よ、我等を憐めよ、我等を憐めよ、我等を憐めよ、我等罪人何をいふべきを知らず、唯此の祈禱を爾主宰に獻げて曰

ふ、我等^{われら}を憐^{あはれ}めよ。

光榮^{くわうえい}は父^{ちち}と子^こと聖神^{せいしん}に歸^きす。

主^{しゅ}よ、我等^{われら}を憐^{あはれ}めよ、我等^{われら}爾^{なんぢ}を恃^{たの}めばなり。我等^{われら}を痛^{いた}

く怒^{いか}る勿^{なか}れ、我等^{われら}の不法^{ふほう}を憶^{おも}ふ勿^{なか}れ、今^{いま}も仁慈^{じんじ}なる

に因^{より}て憐^{あはれ}みを垂^たれ、我等^{われら}を諸^{もろもろ}の敵^{てき}より救^{すく}ひ給^{たま}へ。爾^{なんぢ}は

我等^{われら}の神^{かみ}にて、我等^{われら}は爾^{なんぢ}の民^{たみ}なり。皆爾^{みななんぢ}の手^ての作^{つく}れ

る者^{もの}にて、爾^{なんぢ}の名^なを籲^よぶに因^よる。

今^{いま}も何時^{いつ}も世世^{よよ}に。「アミン」。

讃美たる生神女よ、我等の爲に憐の門を開き爾を
恃む者に亡ぶることなく、爾に依りて禍を脱がる
るを得しめ給へ。爾はハリストスの民の救なれば
なり。

主 憐めよ。十二次

第一祝文

聖大マカリイの原文

永遠の神萬物の王、我を是の時に至らしめ給ひし
主よ、我が今日行言と思にて犯しし所の諸の罪

を救^{ゆる}し我が賤^{いやし}き靈^{たましひ}を體^{からだ}と心^{こころ}との諸^{もろもろ}の汚^{けがれ}より淨^{きよ}め
給^{たま}へ主^{しゅ}よ、我^{われ}に又^{また}是^この夜^よの眠^{ねむり}を平^{へい}安^{あん}に過^{すご}して我^わが
破^{やぶ}れし榻^{ざこ}より起^おき、存^{ぞん}命^{めい}の日^ひに於^{おい}て恒^{つね}に爾^{なんぢ}の至^し聖^{せい}
なる名^なに適^{かな}ふ事^{こと}を行^{おこな}ひ、我^{われ}を攻^せむる有^{いふ}形^{けい}無^む形^{けい}の仇^{あだ}
に勝^かつを得^えしめよ。主^{しゅ}よ、我^{われ}を汚^{けが}す虚^{むな}しき思^{おもひ}と邪^{よこしま}なる
慾^{よく}より我^{われ}を救^{すく}ひ給^{たま}へ。蓋^{おほ}國^{くに}と權^{けん}能^{のう}と光^{くわう}榮^{えい}は爾^{なんぢ}父^{ちち}と
子^こと聖^{せい}神^{しん}に歸^きす。今^{いま}も何^い時^つも世^よ世^よに。「アミーン」。

第二祝文 しゅくぶん 聖アンテオフの原文 せいあんておふのげんぶん

我が主わがしゆイイススハリストスに捧ささぐ

全能者ぜんのうしや父の言ことば完全くわんぜんなるイイススハリストスよ、爾なんぢが多おほくの慈憐じれんに依より、何時いつも我爾われなんぢの僕ぼく（婢ひ）を離はなれずして常つねに我わが内うちに止とどまり給たまへ。イイスス爾なんぢが羊つひじの善よき牧者ぼくしやよ、我われを蛇へびの計はかりこじに付つす勿なかれ、「サタナ」の望のぞみに任まかす勿なかれ、我わが内うちに腐くされの核たねあればなり。主しゆ拜をがまるる神かみ、聖せいなる王わうイイススハリストスよ、我わが寐いぬる時ときに、爾なんぢが滅きえざる光ひかり、即すなはち爾なんぢが曾かつて門徒もんどうを聖せいにせし爾なんぢ

の聖神を以て我を護り給へ。主よ、我爾の當らざる僕
(婢)にも、我が臥牀に於て爾の救を賜へよ。我が智識を
爾が聖福音を悟る光を以て照し、靈を爾が十字架
に於ける愛を以て照し、心を爾が言の淨を以て照
し、我が身を爾が無慾の苦を以て照し給へ。我が思
を爾の謙遜にて守り、時に及びて我を起し、爾を讃
榮せしめ給へ。蓋爾は爾の無原の父よ、至聖の神よ
共に世世に崇め讃めらる。「アミン」。

第三祝文 聖神に捧ぐ

主天の王、慰る者、眞實の神よ、恵を垂れて、我爾の罪
僕(婢)を憐み、我當らざる者に、今日爾の前に、人たる
を以て、又人に降りて、禽獸よりも甚き事を犯しし
を盡く赦し給へ。我が自由ご自由ならざる、知るこ
知らざる罪、年少により、及び悪き習により、縦
により、及び倦によりて犯しし事、若くは爾の名を
以て輕しく誓ひ、或は思の中に之を誹り、或は人を

訴^{のり}り或^{あるひ}は怒^{いかり}を含^{ふく}みて人^{ひと}を讒^{ざん}言^{げん}し或^{あるひ}は人^{ひと}を憂^{うれ}へし
め或^{あるひ}は怒^{いか}り或^{あるひ}は譌^{いつは}り或^{あるひ}は寢^いぬるに其^その時^{とき}に依^よら
ず或^{あるひ}は貧^{ひん}者^{じや}の我^{われ}に來^{きた}るを侮^{あなづ}り或^{あるひ}は我^わが兄^{きやう}弟^{だい}を傷^{いた}
ましめ或^{あるひ}は人^{ひと}の爭^{あらそひ}を起^{おこ}し或^{あるひ}は人^{ひと}を議^ぎし或^{あるひ}は驕^{おご}り
或^{あるひ}は誇^{ほこ}り或^{あるひ}は憤^{いきぎほ}り或^{あるひ}は祈^き禱^{たう}に立^たつ時^{とき}我^わが思^{おもひ}は斯^こ
の世^よの諸^{しよ}事^じに馳^はせ或^{あるひ}は淫^{いん}慾^{よく}を懷^{おも}ひ或^{あるひ}は飲^{いん}食^{しよく}を愼^つ
しまず或^{あるひ}は狂^{きやう}笑^{せう}を發^{はつ}し或^{あるひ}は惡^{あく}念^{ねん}を懷^{いだ}き或^{あるひ}は人^{ひと}の
美^び善^{ぜん}を見^みて心^{こころ}を惱^{なや}まし或^{あるひ}は非^ひ禮^{れい}の言^{ことば}を吐^はき或^{あるひ}は

我が兄弟の罪を嘲りて、己が罪の數へ難きを顧み
ず、或は祈禱を怠り、或は他に惡事を行へども之を
忘る、蓋我悉く之を行ひ、又是より多く行へり、皆之
を赦し給へ。主宰吾が造物主よ、我爾の倦みたる當
らざる僕（婢）を憐み給へ。爾は仁慈にして人を愛
するにより、我を宥め、我を釋き、我を赦し、我淫慾な
る廢てられし罪人に平安にして臥し寢ね休ひ、且
爾と父と其の獨生の子の至尊なる名に伏拜し、之

を歌頌し、之を讚榮せしめ給へ。今も何時も世世に。
「アミン」。

第四祝文 聖大マカリイの原文

大恩を賜ふ常生の王、寛仁にして人を愛する主よ、
我何を以て爾に献げ、何を以て爾に報いん。蓋爾は
我が爾を喜ばすを怠り、何の善をもなさざる靈の
悔改と救を慮りて、我を過ぎ去りし是日の終に
至らしめ給へり。我罪人にして一も善き行なき者

に慈^じ慈^{れん}を垂^たれて、我^わが倒^{たふ}れし靈^{たましひ}測^{はか}られざる罪^{つみ}に汚^{けが}れたる者^{もの}を起^{おこ}し給^{たま}へ。我^{われ}より此^この現^{げん}世^{せい}の諸^{もろもろ}の惡^{あく}念^{ねん}を除^{のぞ}き給^{たま}へ。獨^{ひざり}罪^{つみ}なき者^{もの}よ、我^{われ}今日^{こんにち}爾^{なんぢ}の前^{まへ}に、知^しることを知らずして、言^{ことば}を行^{おこなひ}と思^{おもひ}こ我^わが諸^{もろもろ}の感^{かん}覺^{かく}にて犯^{おか}しし罪^{つみ}を赦^{ゆる}し給^{たま}へ。爾^{なんぢ}親^{みづか}ら爾^{なんぢ}の神^{かみ}の權^{けん}を言^いひ盡^{つく}されぬ。仁^{じん}慈^{じん}の力^{ちから}にて我^{われ}を覆^{おほ}ひ、諸^{もろもろ}の仇^{あだ}の圍^{かこみ}より衛^{まも}り給^{たま}へ。神^{かみ}よ、淨^{きよ}めよ。我^わが罪^{つみ}の多^{おほ}きを淨^{きよ}めよ。主^{しゅ}よ、我^{われ}を凶^{きよう}惡^{あく}者^{しゃ}の網^{あみ}より脱^{のが}し、我^わが慾^{よく}の靈^{たましひ}を救^{すく}ひ、光^{くわう}榮^{あい}を顯^{あらは}

して來る時、爾が顔の光にて我を照し給へ。今も我
を罪なく邪なる夢なくして眠らしめ、爾の僕（婢）
の念を亂れざるに守り、「サタナ」の謀を盡く我より
遠ざけ、我が智識と心との目を明にして、死に眠る
なからしめよ。我に平安の天使、我が靈と體との守
護者、及び教導者を遣し、我を仇より免がして、我が
臥牀より起き、爾に感謝の祈禱を捧げしめ給へ。嗚
呼主よ、我望ご良心の乏しき爾の罪僕（婢）に聆け

よ。我^{われ}に起^おきて爾^{なんぢ}の言^{ことば}を學^{まな}ぶを賜^{たま}ひ、爾^{なんぢ}の天^{てん}使^しを以^{もつ}
て惡^{あく}魔^まの悶^{もだへ}を遠^{さほ}く我^{われ}より離^{はな}し、我^{われ}に爾^{なんぢ}の聖^{せい}なる名^な
を讚^{ほめ}揚^あげ、及^{およ}び爾^{なんぢ}が我^{われ}等^ち罪^{ざい}人^{にん}の守^{しゆ}護^ごとして與^{あた}へ給^{たま}
ひし至^し淨^{じやう}なる生^{しやう}神^{しん}女^{ぢよ}マリヤを讚^{さん}榮^{えい}讚^{さん}美^びせしめ給^{たま}
へ。彼^{かれ}が我^{われ}等^ちの爲^{ため}に捧^{ささ}ぐる祈^き禱^{たう}を納^いれ給^{たま}へ。蓋^{けだし}我^{われ}は
彼^{かれ}が爾^{なんぢ}の仁^{じん}慈^じに倣^{なら}ひ、祈^き禱^{たう}して己^やまざるを^し知^る。
イイススハリストス我^わが神^{かみ}よ、彼^{かれ}の守^{しゆ}護^ごと尊^{たふさ}き十^{じふ}
字^じ架^かの號^{しやう}と爾^{なんぢ}の諸^{しよ}聖^{せい}人^{じん}に依^{より}て我^わが賤^{いや}しき靈^{たましひ}を

護^{まも}り給^{たま}へ。蓋^{けだし}爾^{なんぢ}は聖^{せい}にして世^よ世^よに崇^{あが}め讃^ほめらる。
「アミン」。

第五祝文^{しゆくぶん}

主^{しゆ}我^わが神^{かみ}よ、爾^{なんぢ}は仁^{じん}慈^じにして人^{ひと}を愛^{あい}するに因^より我^わ
が是^{この}日^ひに於^{おい}て、言^{ことば}と行^{おこなひ}と思^{おもひ}にて犯^{おか}しし事^{こと}を赦^{ゆる}し、平^{へい}
安^{あん}にして亂^{みだ}れざる眠^{ねむり}を我^{われ}に賜^{たま}ひ、我^{われ}を諸^{もろもろ}の禍^{わざはひ}より
覆^{おほ}ひ護^{まも}る守^{しゆ}護^ご天使^{てんし}を遣^{つかは}し給^{たま}へ。蓋^{けだし}爾^{なんぢ}は我^{われ}等^{たち}の靈^{たましひ}と
體^{からだ}との守^{しゆ}護^ご者^{しゃ}なり。我^{われ}等^{たち}爾^{なんぢ}父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に光^{くわう}榮^{えい}を

歸す、今も何時も世世に。「アミン」。

第六祝文

主我が神、我等が信じ、諸の名に越えて名づくる所の者よ、我等眠らんとする者に靈ご體ごの息を與へ、我等を諸の邪なる夢ご、闇冥の穢より守り、諸の私慾の動くを遏め肉體の情慾の燃るを滅し給へ。我等に行ご言ごに貞潔を守り、徳を修めて此の世を渡り、爾が約せし所の永福を失ふなからしめ給

へ蓋爾けだしなんぢは世世よよに崇讚あがめほらる。「アミン」。

第七祝文しちめくぶん

聖金口イヲアンの原文せいきんこうげんぶんちうや晝夜二十四時に當つ

晝の十二端ひるのたんだん

主しゆよ、我われを爾なんぢが天てんの福樂ふくらくより除のぞく勿なかれ。主しゆよ、我われを永えい
遠えんの苦くるしみより救すくひ給たまへ。主しゆよ、我われが心こころ或あるひは思おもひにて、言ことば
或あるひは行おこなひにて犯おかしし罪つみを赦ゆるし給たまへ。主しゆよ、我われを諸もろもろの無む
智ちと失念しつねんと頑固ぐわんこと心こころの狹せまきより免まぬかれしめ給たまへ。主しゆ

よ、我^{われ}を諸^{もろもろ}の誘^{いざなひ}より救^{すく}ひ給^{たま}へ。主^{しゆ}よ、惡^{あく}慾^{よく}に昏^{くら}まれし
我^わが心^{こころ}を照^{てら}し給^{たま}へ。主^{しゆ}よ、我^{われ}人^{ひと}ごして罪^{つみ}を犯^{をか}せり、爾^{なんぢ}
は寬^{くわん}仁^{じん}なる神^{かみ}として我^わが靈^{たましひ}の弱^{よわ}きを見^み、我^{われ}を憐^{あは}れ給^{たま}
へ。主^{しゆ}よ、爾^{なんぢ}の恩^{おん}寵^{ちよう}を垂^たれ、我^{われ}を助^{たす}けて爾^{なんぢ}の聖^{せい}なる名^な
を讚^{さん}榮^{えい}せしめ給^{たま}へ。主^{しゆ}よ、イイススハリストスよ、我^{われ}爾^{なんぢ}
の僕^{べく}(婢^ひ)を生命^{せいめい}の記^き録^{ろく}に載^のせ、我^{われ}に善^よき終^{はり}を賜^{たま}へ
よ。主^{しゆ}我^わが神^{かみ}よ、我^{われ}爾^{なんぢ}の前^{まへ}に一^{いつ}の善^{ぜん}をも行^{おこな}はざれど
も、爾^{なんぢ}の恩^{おん}寵^{ちよう}に依^{より}て、我^{われ}に善^よき始^{はじめ}を建^たてさせ給^{たま}へ。主^{しゆ}

よ、我が心に爾が恩寵の露を注ぎ給へ。天地の主よ、
我耻づべき不淨なる爾の罪僕(婢)を爾の國に於て
記憶し給へ。「アミン」。

夜の十二端

主よ、我を痛悔の時に納れ給へ。主よ、我を棄つるこ
ご勿れ。主よ、我を禍に陷るる勿れ。主よ、我に善き意を
與へ給へ。主よ、我に涙と世を去る思と感動とを與
へ給へ。主よ、我に己の罪を痛告する念を與へ給へ。

主よ、我に謙遜と貞潔と順従とを與へ給へ。主よ、我
に忍耐と寛大と柔和とを與へ給へ。主よ、萬善の根
なる爾を畏るる心を我の内に植え付け給へ。主よ、
我に靈を全うし思を全うして爾を愛し、並に萬事
に於て爾の旨を行はしめ給へ。主よ、我を或人と惡
魔と諸慾と其他凡そ不善の者より覆ひ給へ。主よ、
爾は己が行ふ事の其の旨に適ふを知り給へり。願
くは爾の旨は我罪人にも行はれん。蓋爾は世世に

崇め讃めらる。「アメン」。

第八祝文 我が主イエススハリストスに捧ぐ

主イエススハリストス神の子よ、爾の至りて尊き
母、爾が無形の天使、爾の預言者、前驅、授洗、福
音せし使徒、光明なる凱旋の致命者、克肖捧神
なる神父、諸聖人との祈禱に依りて我を惡魔の
圍より救ひ給へ。嗚呼我が主、造物主よ、罪人の死を
欲せず、正しきに歸りて生を有らんことを欲する

者よ、我廢てられし當らざる者をも正しきに歸らせ給へ。我を吞みて生ながら地獄に墮さんとする毒蛇の口より我を脱がし給へ。嗚呼我が主、私の慰となる者、我廢てられし人の爲に朽ち易き身を衣たる者よ、我が廢てられたるを救ひて、我が靈に慰を與へ給へ。願くは爾の誠を守り、惡き行を棄て、爾の福樂を得る望を我が心に納れ給へ。主よ、我爾を恃むに依りて我を救ひ給へ。

第九祝文 しゆくぶん

仁慈じんじなる王わうの仁慈じんじの母はは、至淨じじやうにして讚美さんびたる生神しやうしん
女ぢよマリヤよ、爾なんぢの子こ、我が神かみの憐あはれみを、慾よくに染そみたる我わ
が靈たましひに注そそぎ、爾なんぢの祈禱きたうにより、我われを善行ぜんかうに導みちびきて、我われ
に生命せいめいの餘日よじつを玷きずなく度わたり、爾なんぢ生神しやうしん童貞どうてい女ぢよ、一の淨きよ
き讚美さんびたる者ものに因よりて、天堂てんたうを得えしめ給たまへ。

第十祝文 しゆくぶん 聖守護天使せいしゆごてんしに捧ささぐ

ハリストスの天使てんし、吾わが聖せいなる守護者しゆごしや、我が靈たましひと體からだ

ごを守る者よ。我が今日犯しし罪を盡く赦し、我を
我が仇の諸の計より救ひ、聊も罪を以て神の怒を
招くことなからしめ給へ。尙我罪なる當らざる僕
(婢)の爲に祈りて、我を至聖三者と吾主イエスハ
リストスの母と、諸聖人との恵と憐れを受くるに
堪ふる者とならしめ給へ。「アミン」。

生神女小讃詞

生神女よ、我等爾の僕(婢)は、禍より援けられしを以

て、爾なんぢ克よく勝かつの將帥しやうすゐに凱歌かいうたと感謝かんしゃを奉たてまつる。勝た
れぬ權能ちからを有たもつに依よりて、我等われらを諸もろもろの苦難くなんより救すくひ、
爾なんぢを歌うたひて嫁よめならぬ嫁よめよ、慶よろこべよと呼よばしめ給たまへ。』
至し榮えいなる永貞童女えいていどうぢよハリストス神かみの母ははよ、我等われらの祈き
禱たうを爾なんぢの子こ我わが神かみに携たづへ、爾なんぢに因よりて我等われらの靈たましひを
救すくはしめ給たまへ。
神かみの母ははよ、我わが恃たのみを以もつて盡こころごとく爾なんぢに負おはしむ願ねがはくは
我われを爾なんぢの覆おほひの下したに守まもり給たまへ。

暮の祈禱文

聖イサアンニキイの祝文

七〇

生神童貞女よ、我罪人、爾の祐と爾の衛とを求る者
を輕ずる勿れ、我が靈は爾を恃めばなり。祈る我を
憐み給へ。

聖イサアンニキイの祝文

我が恃は父、我が隱處は子、我が悌懔は聖神なり。聖
三者よ、光榮は爾に歸す。

次に

常に福にして全く玷なき生神女、吾が神の母なる

爾なんぢを讚美さんびするは眞まことに當あたれり。ヘルワームより尊たうとく
セラフイムに並ならび榮さかえ、貞操みさほを壞やぶらずして神言かみことばを
生うみし、實じつの生神女しやうしんぢよたる爾なんぢを崇あがめ讚ほむ。
光榮くわうえいは父ちちと子こと聖神せいしんに歸きす。今いまも何時いづも世世よよに。
「アミン」。

主しゅイイススハリストス神かみの子こよ、爾なんぢが至淨しじやうの母ははと、
我わが克肖こくせう捧神ほうしんなる神父しんぷと、諸聖人しよせいじんとの祈禱きたうに因より
て、我罪人われざいにんを救すくひ給たまへ。「アミン」。

床に就くとき左の祝文を誦すべし

ダマスクの聖イオアンの祝文

人を愛する主宰よ、恐くは、此楊は我が爲には棺ご
 ならんか、或は尙一日の晝を穢たる靈に與へ給は
 んか。視よ、棺は我の前に在り。視よ、死は我が前に立
 つ。主よ、我は爾の審判ご終なき苦を恐るれども、我
 は斷えず惡き事を行ひて、爾主、我が神ご至りて
 潔き爾の母ご、凡ての天軍並に我が聖なる守護天

使^しごを怒^{いか}らしむ。主^{しゅ}よ、我^{われ}は爾^{なんぢ}の仁^{じん}慈^じに當^{あた}らずして
定^{てい}罪^{ざい}ご苦^{くる}ごに當^{あた}るべき者^{もの}なるを識^しる。然^{しか}れども、主^{しゅ}
よ、我^{われ}欲^{ほつ}するも、欲^{ほつ}せざるも、我^{われ}を救^{すく}ひ給^{たま}へ。爾^{なんぢ}は只^{ただ}義^ぎ
人^{じん}を救^{すく}ひ給^{たま}はば、何^{なん}の大^{だい}なるここかあらん。清^{きよ}き者^{もの}
のみ憐^{あはれ}み給^{たま}はば、何^{なん}の驚^{おどろ}くべきここかあらん。彼^{かれ}等^ら
當^{さう}然^{ぜん}爾^{なんぢ}の憐^{あはれ}みを受^うくべきものなればなり。然^{しか}れども
我^{われ}罪^{つみ}ある者^{もの}にも、爾^{なんぢ}の憐^{あはれ}みを垂^たれ給^{たま}へ。是^{これ}を以^{もつ}て、爾^{なんぢ}の
大^{だい}仁^{じん}愛^{あい}を示^{しめ}し給^{たま}へ。願^{ねが}はくは、我^わが惡^{あく}をして、爾^{なんぢ}の言^いひ

盡つくされぬ仁じん慈じと慈じ憐れんに勝かたしむるなく、爾なんぢの
聖み旨ひねの儘ままに我われに行おこなひ給たまへ。

或あるひは

主しゅよ、尊たうとくして生いのちを施ほどこす爾なんぢが十じふ字じ架かの力ちからにて我われを
衛まもり、我われを諸もろもろの惡あくより扞ふせぎ給たまへ。

暮くれの祈き禱たう文ぶん 終をわり

附記

四旬大齋内即大齋第一週間月曜日の前晩より聖
大水曜日に至る迄、スボタ主日祭日の外毎日朝晩
の私祈禱後に左の祝文を誦すべし

聖エフレムの祝文

主吾が生命の主宰よ、怠惰と愁悶と矜誇と空談の
情を我に與ふる勿れ。大拜一次

貞操と謙遜と忍耐と愛の情を我爾の僕(婢)に與へ

給^{たま}へ。大拜一次

嗚呼主王よ、我^{われ}に我^わが罪^{つみ}を見^み、我^わが兄弟^{けいてい}を議^ぎせざる
を賜^{たま}へ、蓋爾^{けだしなんぢ}は世世^{よよ}に崇^{あが}め讃^ほめらる。「アミン」大拜一次

又^{また}小拜^{せうはい}すること十二^{じふに}次^じ、毎^{まい}次^じ誦^{しやう}して曰^{いは}く、

神^{かみ}よ、我^{われ}罪^{さい}人^{にん}を淨^{きよ}め給^{たま}へ。

後^{のち}再^{ふたたび}全^{ぜん}文^{ぶん}を誦^{しやう}す、

主^{しゆ}吾^わが生^{いのち}命^{めい}の主^{しゆ}宰^{さい}よ、怠^{おこ}惰^{たり}、愁^も悶^{だえ}、矜^{ほこ}誇^り、空^{むだ}談^{ごん}の
情^{こころ}を我^{われ}に與^{あた}ふる勿^{なか}れ。貞^{みさ}操^を、謙^{へりく}遜^{だり}、忍^{こち}耐^へ、愛^{あい}の情^{こころ}

を我爾われなんぢの僕ぼく婢ひに與あたへ給たまへ。嗚呼ああ主王しゅわうよ、我われに我わが罪つみを見、我わが兄弟けいていを議ぎせざるを賜たまへ、蓋爾けだしなんぢは世世よよに崇あがめ讃ほめらる。「アミン」。

聖大せいだいバスハより昇天しょうてん祭さいに至いたるまで、朝晩あさばんの私祈しき禱たう中ちゆうに左さの如ごとく誦しやうすべし。
朝晩あさばんとも「天てんの王慰わうなぐさむる者ものよ」を誦しやうせずして、其代そのかはりに左さのバスハの讃詞たねばりを誦しやうすべし。

ハリストス死しより復活ふくくわつし、死しを以もつて死しを滅ほろぼし墓はかに

在る者に生命を賜へり。三次

「常に福にして」に代へて左の讃歌を誦す

新なるイエルサリムよ光り光れよ、主の光榮爾に

輝きたればなり、シオンよ、今祝ひて樂め、爾潔き生

神女よ、爾が生みし主の復活を喜び給へ。